



リステラス星圏史略
古資料ファイル 4-3-1



『皇女戦記』
(皇都陥落・その後)

(発掘整理中)

霧樹里守 is 土岐真扉

『 序章 』（中1か中2？）

『 序章 』（中1か中2？）

2006年7月10日 [連載（2周目・大地世界物語）](#) [コメント\(1\)](#)

今より少し昔、西暦1991年の10月10日のこと、予報はずれの
はげしい嵐の中を、一人の少女が森の中の有澄夫妻の別荘へやって
来ました。

いえ、たどりついた、と言った方が良くかもしれません。

濡れねずみで、半分意識を失い、どこでどうしたものか全身に深い
傷を負っていて、三日三晩の高熱から覚めた時には、おそらく愛称で
あろう マ・ライシャ という名前以外、何一つとして記憶にとどめて
はいませんでした。

少女は耳慣れない言葉を話しました。

それは日本語でも英語でもなく、フランス、ドイツ、イタリア、中国、
ソビエト、北欧.....外交官である有澄氏が聞きかじりのかたことま
で混ぜて話しかけてみましたが、どれ一つとして通じません。

骨の折れていない方の左手で少女がぎごちなく書いてみせる文字
の中に、古代エジプトやモヘンジョ・ダロの、解読不明のそれに似
たように思えるものがあって、大学教授や研究者にも見せてみま
したが、わかりません。

尋ねてきた友人

コメント



[霧木里守≡畑楽希有（はたら句きあり）](#)

2014年7月10日2:41

ひみつ日記 出しときますw

※ 今より少し昔、西暦1991年の10月10日のこと ※

繰り返しますが、これを書いたのは、
西暦1970年代の後半（1978?）、
私が「中学生」だった頃.....です☆

(^◇^;)d”

人物小史／有澄 真里砂 2009年9月25日

[人物小史／有澄 真里砂 \(*創作*\)](#)

2009年9月25日 [リステラス星圏史略 \(創作\)](#)

有澄 真里砂 (ありずみ・まりさ)

>ルア,マル=アライシャ (皇女マーライシャ)

人物小史／有澄 砂絵子 （*創作*） 2009年9月25日

[人物小史／有澄 砂絵子 （*創作*）](#)

2009年9月25日 [リステラス星圏史略 （創作）](#)

有澄 砂絵子（ありずみ・さえこ）

衰亡した梨泉院（ありいずみ）家傍系の最後の一人。

夫は外交館員。本人は多言語学者。

有澄真里砂の地球世界における養母。

主な登場（予定）作品：

「暗黒童話集」

「朝日ヶ森」シリーズ

「大地世界物語」（皇女戦記編）

有澄 砂絵子

有澄 砂絵子 (ありずみ・さえこ)

衰亡した梨泉院 (ありいずみ) 家・傍系の最後の一人。

夫は外交館員。本人は多言語学者。

有澄真里砂の地球世界における養母。

主な登場 (予定) 作品 :

「暗黒童話集」

「朝日ヶ森」シリーズ

「大地世界物語」 (皇女戦記編)

[20](#)

最終更新日 : [2011-02-08 19:00:34](#)

P1

大地の国（ダレムアス）物語・「皇女・緑の炎」

第一部 地球——森の少女

どうどうとたけが荒れ狂う嵐の森の中を、少女は必死で逃げていました。

雷（いかづち）が天をさき、風が木をひき倒し、大つぶの雨は横なぐりにたたきつけて、闇の中、一寸先も見ることはいけません。

枝の先や鋭い下草が、少女の手足を刺し、衣服をとらえてひきちぎります。

冷たい雨に打たれて、少女はすでに感覚を失っていました。

あるのはただ恐怖と、少しでも遠くへ逃げなければというあせりだけです。

追手があるのか、ないのか、どちらへ行けばこの樹海から抜け出ることができるのか。今の少女にはそんなことは何もわかりません。恐怖に耐えるにはあまりに幼なすぎて、無我夢中で遠くへ、遠くへと走って行く以外、他に何ができたろう。たでしょう。

——安全な所へ！

足を踏みはずしたその一瞬、自分をかばうために後に残った、おそらくはもう殺されてしまったろうトルザン卿の、最後の声が頭に響きました。

「お逃げなさい。少しでも遠くへ。安全な所へ。そして身を隠すのです。

けっして御身分をあかしてはなりませんぞ。けっして！」

けっして けっして けっして....

がんと割れるような頭の中に最後まで残っていたのはそれだけでした。

濁流に足下を大きくめぐり取られていた崖のふちは、少女の重みに耐えかねて、ぐらりとばかりに傾くと、少女を乗せたまま数メートル下の激しい流れの中に落ちて行きます。

遠のいてゆく意識の中で、少女は渦巻く水面（みなも）に見えかくれする黒くなめらかな腕が、稲光りの中にぼうっと浮かびあがるのを見たような気がしました。

腕の主たちはとても美しく、猛々しくて、かみつぎ、ひきさき、踏みにじって、およそ思いつく限りの乱暴をしながらも、なぜか少女にだけはその荒々しい手を出そうとはしませんでした.....。

P2.

次に気づいた時、少女は川の中州にうちあげられていました。
嵐はいっこうにおとろえる気配を見せず、川の水はどんどん上がってきます。
このままここにいれば、再びこの濁流に飲み込まれてしまうでしょう。
そうなったらおしまいです。
少女の体は冷えきっていて、これ以上川の中において、生きのびられるだけの体力は残っていないのです。
少女にはそれがわかりました。
それでもいいような気もしました。
全ての望みを失ってしまったように思える今、幼ない少女にとって死ぬということはそれほど怖い意味を持たなかったのです。

少女の心の中に、死人（しびと）の靈魂（たましい）を冥界へ運ぶ者たちの誘う声が響きました。

—— おいで。おいで。少し体をずらして、川の流れに身をまかせるのだ。

おまえの肉体（からだ）は川がいいようにしてくれるよ。海へ運んでゆくよ。

「海へ？」 少女はなんとか体を持ち上げて尋ねました。

—— そうさ、この世界では人間の肉体（からだ）は海から生まれ、海へ還ってゆくのだ。この丸い地の国（ティカース）ではな。

「……ここは大地の国（ダレムアス）ではないのね……」

—— そうだ。ここはおまえの故郷からは遠くはなれているよ。

「大地の国（ダレムアス）へ帰りたい。お母さまの所へ帰らせて。」

“声”たちはしばらく答えませんでした。そのうちに一つの“声”が言いました。

—— 残念だがそれはできない。……わしらにその力は与えられていないのだ。わしらにできるのはおまえを冥界へつれてゆくことだけなのだ。

「そこにはなにがあるの。」

P3.

—— なにもない。冥界にいるのは魂（たましい）の司（つかさ）たちと、たくさんの眠っているたましいだけだよ。

“声”の語る言葉を夢現（ゆめうつ）に聞きながら、少女は川の中へ体を入れました。冷たい水がすぐに少女の心を肉体からひきはなします。

—— そうだ。それがいい。おまえの背負った運命（さだめ）はおまえには重すぎる。別の世界へ行った方が良いのだ。 さあ、もう足下に道が見えるだろう。真直ぐ行くのだよ。

言われた通りに少女は歩きはじめました。

気がつくとなんとすぐ隣になにか明るいものを掲げた人がいます。

それが少女を導く“声”の主（ぬし）でした。

暗くて悲しい闇の中の道にぽつんぽつんと同じようなかすかな明かりが動いてゆきます。

すぐ前にいるのはトルザン卿なののでしょうか？

それは自分自身を送る死者たちの葬列でした。

「これからどうするの？」

—— なにも。冥界では人はなにもしないのだ。ただ、眠って自分の過ごしてきた一生の夢を見る。

夢が終わった時、また別の世界へ、新しい人生に向って船出する……。

おまえの次の人生が今より楽なものであることを祈っているぞ。

……ほら、あそこじゃ。

前の方に死者と生者を隔てる大いなる扉がありました。

いかなる賢者、魔法使いといえど、生きてあの扉の内に入ることはできません。

「あれは……？」

少女は扉のわきを通ってはるかにのびていくもう一本の道を指して尋ねましたが、答えを得ることはできませんでした。

扉が音もなく開かれました。

—— ここへ入れば、今までのことはすべて忘れられる。眠って心の傷をいやすがいい。

P4.

少女が恐るおそる扉の内へ踏み込むと、とたんになんとも言いようのない安らかな眠気があたりを覆います。

少女がその中に自分を委ねようとした、その一瞬。——扉の外から一本の腕がのびて、ぐい、と少女を引き戻しました。

扉の外のもう一本の道から、不意に現われた影があったのです。

「無礼者！はなしてっ！」

突然の事にかっとなって少女が叫びました。

いまだかつて手荒な扱いを受けたことのない高貴な生まれの者に対して、なんというまねをするのでしょうか。

心地（こち）良い眠りから引き戻された怒りと相まって、激怒している少女の頬に、ばしり！と平手打ちが飛びました。

「お目をお覚ましなさい！」

厳しい口調にはっとして顔をあげると、そこには、少女の故郷の衣服をつけた女戦士の姿がありました。

どこかで見たことのある女性です。

そしてその人は生きていました。

少女を追って、生きたまま、世界の外へやってきていたのです。

「おまえは……」

女戦士は片ひざをついて少女の手をとりました。

「皇女…」

深いまなざしがまっすぐ少女にそそがれているので、おのずから視線をかえさずにはいられません。

いつのまにか、少女は女戦士に対する怒りを忘れていました。

「皇女。あなたにはまだ、この扉を越えることの意味がわかっておられないのです。この扉の内側に入った時、人は全ての記憶を失ってしまわれるうのですよ。」

信念を持って話しているのは確かでしたが、なぜかひどくつらそうな顔をしていました。

「今現在あなたがその事をどう思われようと、あなたは皇の御息女としてお生まれになりました。そしてそれは過去の幾多の人生の中

P5.

の行動を通して、あなた御自身がお選びになられた事なのです。

行末の困難が案じられるからといって、今になってそれからお逃げになるのですか？ あなただけの事ならばともかく、皇女は国の存亡の鍵を握る方なのです。あなたがいなくなれば、大地の国人（ダレムアト）たちはどうなるのです。……皇女、幼ないあなたに対してむごいことだとは思いますがどうか、どうかお戻りになられますよう……。」

戦士が言葉を切った時、冥界への導びき手が吼えるように叫びました。

「——ならん。ならんぞ。いかな不死人（ふしびと）のおまえでも、一度（ひとたび）扉の内を足を踏み入れた者を連れ帰ることはできぬ。来るのが遅かったのじゃ。その娘は既に冥界の人間ぞ！」

「わたしが連れ帰るのではない。御自分の意志で帰られるのだ」

戦士はきつとなって言い返しました。

「皇女にはそれだけの“力”がある！」

「——力があってもそんなことはせぬ。おまえたちがこの娘に負わせた運命は重すぎるぞ。好き好んで身にあまる重荷を背負おうとするものがどこにいる。」

戦士はうなだれて、言い返す言葉を持たぬようでした。

「——これで決まりだな。……さ、こちらへおいで。おまえはもっと自分にふさわしい人生を歩むべきだ。」

少女はなおも扉に目をうばわれながら必死で後ろへさがりました。

あの安らかな眠りの中に入りたくて入りたくて泣きたいくらいです。

でも、でも……。

「辛い所より楽しい所に行きたいと思うのは逃げることになるのね」

———逃げることは罪ではない。おまえにはそうする権利があるのだ。

少女は懸命にかぶりをふりました。

だめ！だめ！

涙があふれて扉の姿がぼやけました。

「わたしは皇女なの。皇の娘はどんなことがあっても逃げてはいけないって、

P6.

お母さまに言われたの……」

「皇女！」

戦士は叫び、導びき手は低くうなって扉を閉じました。

「行きます！ 帰ります！ つれて行って下さい！ ……もう、もう道がわかりません！」

少女はそのまま泣きくずれてしまいました。

「皇女・緑の炎」

「皇女・緑の炎」

2016年1月20日 リステラス星圏史略 (創作)



『大地の国（ダレムアス）物語・「皇女・緑の炎」第一部 地球－森の少女（続）』
（@小学校6年、か中学1年？）

[『大地の国（ダレムアス）物語・「皇女・緑の炎」第一部 地球－森の少女（続）』](#)
[（@小学校6年、か中学1年？）](#)

2007年6月14日 [連載（2周目・大地世界物語）](#)

P7.

冴子（さえこ）夫人は嵐の窓辺に立って森の荒れ狂う様をながめていました。
繰り返し聞こえる悲しい呼び声は、いくら幻聴だと自分に言い聞かせてみても激しく心をゆさぶります。

——助けて——。ママ——！ 暗くて寒いよ。怖いよォ！」

それは、遂に産声（うぶごえ）を聞かせてくれることのなかった冴子夫人の娘、真里子の救いを求め泣き叫ぶ声です。

結婚5年目に待ちに待った最初で最後の子供を流産し、二度と子供は持てないと宣告された時、夫人は半狂乱になって三日三晩泣き続けたものでした。

以来、朝に夕に真里子の泣き声が遠くから聞こえてきました。医者は、ショックによる精神衰弱から来る幻聴だと言い、勧められるままに森の奥深いこの小さな別荘へ療養に来てから1年が過ぎ、今、冴子夫人は辛い決心を固めようとしていました。

ピカッと稲妻が走り、寸暇をおかずに雷鳴が地をゆるがし、また一陣の突風が窓ガラスに大粒の雨をたたきつけて来ます。

が、その一瞬、冴子夫人は確かになにか動くものを見ました。

彼女の方をふいとふり返って見た透（とおる）氏は、そのひきつった表情を見てぎくりとしました。

「どうした!? また発作なのか！」

——もう、治ったと思っていたのに……。

彼の言葉にはそんな悲痛な想いがこもっていました。

「いいえ、いいえ違うの。幻覚じゃないわ。あそこ……柵の所に、なにかがいるの」

「まさか、この嵐の中を出歩ける奴がいるものか」

その時、ひときわ明るい雷が空全体を紫色に浮かびあがらせました。

「まちがないわ、透。ほら！」

P8.

とめる間もなく、冴子夫人は嵐の中へ飛びだして行きました。

「冴子!? おい冴子!!」

一足遅れて、透氏が追いかけてみると、柵の外に全身泥まみれになって小さな女の子が座っていました。

その傷だらけの姿を見て、透氏は冴子夫人が悲鳴をあげるのだろうと思いました。

が、冴子夫人も根はしっかりした心の強い女性です。

蒼ざめた顔できつと目を見開いてはいましたが、けっしてうろたえた真根はしませんでした。

「あなた、あなた！　しっかりしなさいっ！　眠るんじゃないわよ！」

冷えきった体でぼうぜんとして空を見つめていた少女は、冴子夫人に頬をたたかれてはっと我に帰りました。

「アルテス！　アルテス　ダレマヌウク！」

——助けて。助けて、お母さん。

聞いたこともない言葉でしたが、言っていることは容易に理解できました。

少女は冴子夫人を自分の母親とまちがえて必死ですがりついてきたのです。

「スタクアラム　ドル　マリーク　イマルスア？」

——どうしたらこの森から出られるの……

それだけ言って再び沈み込むようにくずおれた少女の瞳は恐怖でいっぱいになっていました。

少女を暖かい家の中に運び込んだ時、透氏はまず夫人に服を替えてくるように言いましたが、彼女はがんとして聞き入れませんでした。

壁の中央に切り込みになっている古めかしい暖炉に、どんどん石炭をくべて部屋の中が暑くるしく感じられるほどになりました。

泥だらけの服を脱がされて、かわいた暖かい所に移された少女は、額も頬も燃えるように熱く、それでいて手足は冷えきったまま、少しもぬくもりが戻ってきません。

——もし、この子がこのまま死んでしまったら……。

P9.

必死で少女の看病をしている冴子夫人を見て透氏はぞっとしました。

どこから来たとも知れないこの少女が、もし、このまま死んでしまうような事になったら、彼女は今度こそ本当に気が狂ってしまうのではないのでしょうか。

夫人自身もやはり同じことを考えていました。

少女が夫人にしがみついた時の顔が、夫人の心の中で、死んだ真里子の幻影と重なります。

生まれる前に死んでしまった娘、と、今ここで生死の境をさ迷っている見知らぬ少女と、面影が似ているというわけでは決してないのですが、どうしても、もう一人の自分の娘、さもなければ死んだ真里子の生まれ変わりのように思われてしかたがないのです。

.....続.....

『 順不同・モチーフ（粗筋メモ） 』 続き。 (@中2? < 『指輪〜』のアニメ版を劇場で見た[後])

[『 順不同・モチーフ（粗筋メモ） 』（@中2? < 『指輪〜』のアニメ版を劇場で見た\[後\]なのは确实☆） 続き。](#)

2006年7月12日 [連載（2周目・大地世界物語）](#)

- その昔、皇女マーライシャと皇子マリシアルは、
女皇をして将来近親婚の禁を犯すのではないかと
不安にからしめるほど仲むつまじかった。

- マーシャたちの運命は、銀河帝国じゃあるまいし
計画されたものでも運命づけられたものでも
予言や計算によってあらかじめわかっていたものでもなく、
ただ《人事をつくして天命を待つ》べく個々の人間が
その時その時に自分にできることをした結果つくられた。

- 鋭は、一旦、科学の専門教育が受けられると喜んで、
新設の国立科学者養成センターへ行くのだけれども、
あまり非人道的反平和的で、反戦・自然擁護主義の鋭は
朝日ヶ森の話聞いて脱走を決意。
しかし脱走計画が発覚しそうになって、
準備のないままに飛びだした。
一旦、養護院へ戻り、園長の有澄夫妻あての紹介状をもらい、
どこをどうくぐりぬけたものか一ヶ月後に朝日ヶ森についた。
学長は鋭がくわしい話をするまでもなく全て了解した様子で、
至急 有澄夫妻が呼ばれて転入手続きを行った。

- マーシャは、朝日ヶ森にいる時から魔法（鋭はさい眠術と言うけれど）
を少し使えて、いくつかの事件に出会ったことがある。
(カイ、レム、律子、露美緒、正、亀山田貫（たぬき）)

- 体育祭の朝、駐車場、霧、落ちる。

- 森、九尾の狐の精
- 村
- 満月亭
- 城市の不思議の旅人を尋ねる。
(精霊、
昔、危機皇ダレルが武者修行にでて東方はるかに旅をした時、
森の中で一人の……)
- 朝日ヶ森転入式の前夜、マーシャの窓辺に一人の騎士。
そこから始まる不思議、朝日ヶ森のなぞ。
- 「マーライシャ様」「はい」
驚いたことに、マーシャはそれが自分の本名だということが
すぐわかりました。
- 「わたしは王家の娘ですっ」
- 体育祭の朝、有澄夫妻を待ちながら、三人で、
それまでの推移を話しあっている。
- 「あっ来たわ！」 霧、落ちる。
- 森、九尾の狐、ここはどこだろうのディスカッション、
遠くの森人たちのひびき、マーシャ、郷愁の念から解放される。

- 村、
「そういえば最近言わなくなったね」
「あたりまえだよ、マーシャの故郷探しどころか、
地球そのものから、はみだしてんだぜ」
マーシャ、言われて始めて気づき、疑問を抱く。
彼女は言葉の覚え方が異常に速い。
- 旅籠、満月亭で村人たちの会話を小耳にはさみ、
雪白と野ぶどうの瞳に会う。
「わたしはただある人からこれをおあずかりしただけなんですよ。
まさか忘れ病におかかりとは……」
「あずけられた相手ですか？ さあ。
わたしの友人の紹介で来た方なんですけど、
暗かったし、布を頭からかぶってらして……
話し方からして不思議の旅人のお仲間には違いないんですよ。」
不思議の旅人の存在を知る。

「ちきしょう。
なんでおれたちであいつを守ってやれないんだよ！
あいつは5月の森みたいだったんだ。
あいつは森になりたかったんだよ。
それなのに木枯らしがあいつを冷たくさせてしまう。
そうして、あいつ自身の炎が森を灰にしてしまうんだ！」

2007年6月12日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#) [コメント \(2\)](#)

業火。

美しかったルア・マルライン——麗しの真白き都——の皇城が、二人が生まれ育った場所が地獄の炎に滅ぼされようとしているからといって、嘆いたりひるんだりしている暇はありません。

「こっちだ、マ・リシャ！」

「はい、兄様（にいさま）！」

心を引き裂く程の苦しく辛い想いを、今、二人は考えてはならないのです。

駆け抜けて行く幾筋もの闇。火の手。

どこから現われるか知れない卑劣な地獄の群れ。

射かけられる火矢の一つ一つに対してさえも、互いにかばいあっている余裕はありません。

全神経を張りつめて走ってゆくさなかにあっては、涙で視界を乱す事、即ち死です。

幸いにも城のこちらの翼へは、まだあの悪鬼たちも入り込んでいないようでした。

二人が後にして来た皇の執政の間から、鈍い戦いの音がかすかに追いかけて来ます。

父母たる皇と女皇への強い愛情が、きりきりとちぎれんばかりに二人の眉をしめ上げ、唇からは細い糸のような血の筋が、涙の代りをつとめるかのように湧れ出してゆきました。

今はもう、聞こえる音といえどどこかで城が燃え落ちるゴウツという響きと、駆け続ける二人の足音と、荒い自分の息だけです。

マーライシャ皇女は必死で嗚咽をかみ殺しました。

皇統連綿たる女神マリアヌディアムの直系、是が否でも生き残らねばならぬ皇位継承者であるという誇りと責任とだけが、この年若いというよりはあどけなさの多く残る幼い皇女を走り続けさせている全てでした。

回廊を一つ曲がると、そこはもう奥宮の西のはずれ。

自らつけた炎に照らされて、地獄鬼（ガラゴドム）どもの一隊が聞くもおぞましい下卑た喚声と共にちょうどその時攻めのぼって来ました。

建物の中の暗さが幸いして、まだ二人は見つかってはいません。

が、厩舎へ向う以上遅かれ早かれ真向からぶつからねばならない難関です。

皇子と皇女はほんの一瞬だけ立ち止まって互いに目を見交わし、それだけで全てを了解し、二振り of 剣が同時にひき抜かれました。

もはや自分の二本の腕、二本の脚で、打って出るより他生きのびる道はないのです。

不意に皇女がのびあがって、兄皇子の頬に唇を触れました。

「どちらか一人だけでも」と皇女は言いました。

「必ず生きて逃げましょうね。」

兄皇子はすぐにその言わんとするところを悟り、思わず空いていた左手で妹を張りつけました。剣において勝っているのは自分です。

足の速さにおいても、運の強さにおいても、生きのびる事のできる確率が高いのは妹皇女（ひめ）ではないのでしょうか。

皇子はぎゅっと皇女を抱きしめました。

大地の国の明日のために、瀕死の深傷を負った父皇や全滅したに等しい軍を率いて最後を守ろうとしている母皇に、別れを告げて走って来る事はできても、妹皇女（ひめ）マーライシャを見殺しにする事だけは皇子マリシアルにはできませんでした。

正式の習練はまだ積んでいないとはいえ、生まれつき『見はるかす眼』と心話の術（すべ）とを身につけている兄妹にとって、相手の悲しみは過敏にすぎる程の鋭さをともなって互いの心につきささります。

皇子の皇女に対する愛が、単に妹を思う兄のそれからはるかにかけ離れている事は、とうの昔から二人ともが認識している事実でした。

マーライシャ皇女——マ・リシャは、しばらくじっと抱（いだ）かれたまま、兄の嵐のような感情が心の中を駆け抜けて行き過ぎるのを待ちました。

こんなにも近く頬と頬とが触れているような時には、二つの心が近くにいる段階を乗り越えて、まるで一つの魂に二つの心が迷い混んでしまったようです。

縛（いまし）めをひきちぎらんばかりにして叫んでいる半馬神の激流が兄の心なのか自分の姿なのかを見誤らないために、マ・リシャは全ての心を閉じ、渦巻きだそうとする淡い夢を押えつけて、深い沼の底の歩んで来た年月と共に降り積もった泥層深くにまで打ち込まれた、呪縛にさえ似た楔を見つめ続けました。

マ・リシャの心をつなぎとめているものに気づいて、皇子の心に雷撃にあったようなふるえが走り、それからぱったりと静かになりました。

マ・リシャが顔を上げると、攻めのぼって来る地獄鬼どもの足音が先程よりはかなり近くに響いています。

「マーライシャを……」言ってマ・リシャは口ごもりました。

「ダレムアス皇女“マルラインの若葉”マーライシャを、ガルゴドム達は殺さないわ。

ここで捕えられて地獄の帝王（ボルドゴルム）の後宮に放りこまれるのも、生きのびていつか西の皇のもとへ嫁（ゆ）くのも、わたし個人——マ・リシャという小娘一人——にとっては同じ事なのかも知れないけれど、

「ダレムアスの皇女は、母なる大地の災いとなる事を望みません。」

マ・リシャは一瞬、細い首をきっぱりと持たげ、それからまた目を伏せました。

「——だってそうでしょうか？ もし兄さまが皇位につく時に、わたしがボルドゴルムの妃にされていたら、その時はお兄さま、わたしを見殺しにしてくれる事ができますか。」

皇子には答えられない質問でした。

マ・リシャは大きく息を吐き出しました。

「だから万ヶ一敵の手に陥ちるようならば、わたしは潔く舌を嚙むわ。 兄さまは必ずかたきをとってくれるわね？絶対に。」

無言のままマリシアルはうなづきました。

「マ・リシャ……」

「え、なあに兄さま」

マ・リシャが顔をあげると、城の焼け落ちる炎に照り映えて、兄の頬に流れるものが光っています。

マリシアルは目を閉じ、顔を上に向けたまま、声のふるえを隠そうともせずに言いました。

「わたしのかわいそうなマ・リシャ。……生きるね？ 西との婚儀はきっとわたしが何とかする。この先どんな辛い事があろうとおまえを守ってやる。だから生きるんだ。いいね!？」

「兄さま」

マ・リシャはゆっくり答えました。

「わたしは女神の直系、大地の皇女。お父さまとお母さまの娘です。誓って逃げたりはいたしません。」

マリシアルの黒い太陽のような瞳が、真っ直ぐにマ・リシャの瞳を射抜きます。

正統なる女神の子孫であり、母の娘であることの誇りをかけて、マ・リシャはその視線を受けとめました。

「父の息子であることにかけて言っているんだぞ。」

「母の娘であることにかけて答えていてよ。」

マ・リシャは両腕を交差させて胸の上に置き、肩をつかんでいる兄の腕に手の平を重ねました。

「大好きよ兄さま。大地の上のだれよりも。」

二人は再び走り始めました。

遂に皇女皇のいた執政の間すらも陥ちてしまったのでしょうか、城の中心をついて天高く火の手が上がるのを二人は見ました。

思わず濡れそうになった悲鳴をふせぐために、噛みしめられた左の指から、紅い涙のような血が流れだします。

皇子と皇女を探せ！という声が、口々に叫ばれ始めました。

幼ない頃から毎日かくれんぼをしてきた宮殿内です。

植え込みの中の秘密の通路を通り抜け、渡殿の下に秘み、中庭から中庭へと流れる小川に身をしずめて、二人はじりじりと厩舎に近づいて行きました。

全ての地獄鬼が二人を探そうとくり出して来ている今、もはや二振りの剣のみで切り抜ける事は不可能です。

明る過ぎる炎がより一層闇の暗さを濃く見せていたという事実がなければ、二人は半時間と無事にいる事はできなかったでしょう。

P3

第一章

雲一つなく晴れわたっているはずなのに、空の光は遠く、空と大地の間に薄い浅黄色の幕が張りめぐらせてあるようでした。

大人たちの話では、その目に見えないほど細かい火山灰は、はるか彼方の、母神マリアンドリームが眠る炎の山より風に乗って飛んできたものなのだそうです。

マーライシャは一人窓辺にほおづえをついて、少し行儀の悪い恰好で空と、その青い布に時折現われる、様々な色合いの光のレース模様を見るときもなしに見ていました。

つまらないのです。たいくつなのです。

かなり前から始まった地震や雷、加えて一昨日（おととい）からのこの火山灰天気で、遠乗りやはともかく、庭へ出ることさえ禁止されてしまったのです。

それでなくても、こう空気中が黄色い細かい灰でいっぱいでは外に出る気などおこるものではありません。

マーライシャは朝から三十と六回目のため息をつきました。

まだ十時のおやつにさえなっちはいなかったのですが。

すると、幸わいにも兄上のマリシャル皇子が戻ってきました。

「マ・リシャ、遅くなってごめん。待たせた？」

「ほんの少しだけだわ」

マ・リシャというのはマーライシャのごく内輪の愛称で、皇と女皇と皇子、それにフエヌイリ姫の兄、フエラダル四人しか使いません。

マリシャル皇子は少しばかり偵察に出て、食物倉から少々お菓子を失敬し、それと共に一大ニュースも聞きかじってきていて、すっかり興奮していました。

ところがマーライシャときたら、皇子が口を開くよりも早く、彼を一目見るなり聞きました。

~~「一体何が起こったというの!？」~~

~~「これはしたり。まこと皇女（ひめ）の勸の良さには敬服せざるを得ませんな。」~~

~~皇子が、秘密を言い当てられた時のトーザン卿の憤慨ぶりそのままに、おまけにひげをしごくまねまでもしてみせたもので、マーライシャはことごと笑いころげ、つられて皇子も笑いました。~~

~~「まったく、内緒にしておいてあとで驚ろかせようと思ったのに、おまえときたらすぐに見抜いてしまうのだからなあ。当てられたからには仕方ない、話すけれど……。」~~

深皿に入ったすてきにべとべとする煮りんごを突つきながら、皇子は聞きかじってきたことを全部妹君（いもうとぎみ）に話して聞かせました。

~~皇女と皇子の年の差を考えれば当然のことなのですが、彼女には皇子がその時に教えてくれたことのうち三分の一は理解できず、わからなかった事柄や、理解はしても直接自分に関（かか）わりがなさそうに思える所は聞くはじから忘れていきました。~~

西の谷の村で、突然季節はずれの大雨が降って、折（おり）からの地震と共に山津波（やまつなみ）となって村を襲い、逃げ遅れた人達が十人近く死んだこと。

同じような災害が各地におこって、その救済のために多勢の力有る者（ちからあるもの）、すなわち魔法使いや精霊、神々の血を受けた者たちが力をつくしてはいるものの、着（き）の身（み）着（き）のまま全財産を失ってしまった人たちが大勢いること。

話を聞いているうちに、マーライシャはだんだん興奮してきました。

「ひどいわ。いったいなぜ、だれがそんなことをしているの!？」

「いや、だから、そこが不思議なところなんだよ。ぼくらの住んでいるこの美わしの白い館（ルア・マルライン）近辺は、土地そのものに護りの魔力が強いからまだ被害が少ないけれど、“異変”はダレムアス三百六十六国、程度の差こそあれ、全ての国を覆っているんだ。特に大地の背骨山脈の周囲の国は、ひどい地震がかた時も休まらないそうだよ。女神の山が火を噴く前ぶれだなどと言いだした者もいる。根も葉もないうわさで、すぐに消えたそうだけど」

「当たり前だわ。女神の山が火を噴く時は世界の終る時ではないの。」

「だから単なる流言だよ。……ただ、おかしいのは、だれもそんなことは

P4.

ことなんだ。」

「だれも!？」

「そう。だれも。これだけの大異変を引き起こすには恐ろしく強い魔力が必要だ。最も力の強い精霊でもそれだけの力はないよ。父上と母上が力を合わせても無理だろうな。とにかく、それ程の魔力が振るわれていれば、どんなに当人が気を使ったところで、心の瞳をいっぱい開けば、見つけられないはずがない。」

「それでもわたしは見つけられないわよ。もう何回も試しているのに、」

「だろう!？ だからこの異変は大地の国人（ダレムアト）が魔法を使っておこしたものではない。と、すれば、残るは神々か、あるいは聖なる霊達御自身の力しかない。ここまでは父上達にもすぐわかったんだ。問題はそこから先さ。何のために？ 力有る者は皆、災害を食い止めるのに急がしかったから、異変後一週間たってから、やっと理解した。神人（かみうど）の長（おさ）、女神マリアンドリームを始めとした諸神が“大地の言葉”を借りて、ぼくらに何かを伝えようとしているんだとね。」

「大地の言葉って、この世の始まりに女神が聞いたというあの声と同じものなの？」

「うん。どうもそうらしいよ。ぼくにもよくはわからないんだけど。

それから後は、危うくばあやに見つかりそうになってね。聞いている暇がなかったんだ。」

(☆窓辺に寄りかかって林檎を嚙りながら語る黒髪の皇子と、足下に座って話を聞く緑黒髪の皇女の「挿し絵」あり。シャーペン書き、色鉛筆塗り。)

(作業@2016年1月20日)

[作業](#)

2016年1月20日 [リステラス星圏史略](#) (創作) コメント (1)



『 Da Lem Earth -大地の国- 』 (@中学1年か2年)

2007年6月8日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#) [コメント \(1\)](#)

(大学ノートにシャープペン横書き)

P1.

昔、はるかなるダレムアスの大地に幸せの花が咲き乱れていた頃、王の中の王の都、ルア・マルラインが美しく栄えていた頃、国中の祝福の中で、王の第2子、王女マーライシャが生まれました。

王女は、母君の美わしきエルフェリヌ（エルフ乙女）、水面月のフェイリーシャ様に似て、透けるような白い肌と美しい声を、そして、王家の誇りたる豊かな黒髪と星の光る夜の空の色の瞳をしていました。

ただ、その髪の色は普通の黒ではありませんでした。母君の深緑色の髪の色が、陽の光のもとでは濃い緑色に見えるのです。殊に王女が笑っている時には緑の色が強くなるようで、兄君と一緒に遊んでいる時などには、夏の山のような緑色の炎が王女のまわりでゆれました。

ある年のこと、ダレムアス全体に、わけもなく不安な空気が広がりました。草も、木も、太陽の色も、どことは言えず、なにかがおかしいのです。賢者や魔法使いなど、ダレムアスに住む力有る者たちはこれを神々からの警告であると判断しました。

即座に賢者会議が開かれ、魔法使いや賢者は言うまでもなく、天翔けるエルフェリ族や、異世界から来たエルシャマーリャ（天上人）、名高い王侯騎士たちなど、ダレムアス世界の主だった力有る者が続々と王都ルア・マルラインの城中に集まってきました。

彼らは城の奥深くにこもり、異変を告げる数々の兆候を、ありとあらゆる角度から調べ上げ、検討し、数週間に渡る会議のあげくに、遂に一つの恐ろしい結論にたどりつきました。

「おのおのがたにけしてこのことを他言なさらぬようお願い申す。」
賢者団の議長、予見者クラウドは老いと数週間の心痛のあまりにふるえる声で、しかし厳しく一同に言いわたしました。

そして更に数週間、語るべきことは全て語りつくして、会議の出席者たちは旅出って行きました。ある者は故郷へ、またある者は長い放浪の旅路へ、不安げな顔もあり、悲痛な面持ちもあり、ただ、皆一様に厳しい決意の色を表して、来るべき嵐を向え打つために、長い孤独な戦いに踏み出しました。

P2.

けれど、最も苛酷な運命を負うことになったのは、まだやっと馬に乗り始めたばかりの幼ない王女でした。

王女は、万ヶ王城が陥ちた時の事を考えて、王家の血統を絶やさぬため、また来たるべき日のための隠し刀として、今は絶えて行き来のない、かつての姉弟世界、異世界ティカースへ移されることになったのです。

ある月の晩、うばとたった二人の騎士と共に、王女は異世界へ抜ける魔法の通路（みち）を歩いて行きました。

丸い大地の国（ティカース）へ。

王女も、また、他のだれもが、かの恐るべきボルドムの魔手がすでにティカースへさえ伸びていることを知りませんでした。

そして、それがこの物語の始まりだったのです。

(☆8歳ぐらい？の略武装の剣と宝冠を身に付けて暗い不安げな表情の
王女マーライシャのシャープペン描きのイラストあり)

1. 嵐の晩に

「ひどい嵐になったわね」と、有澄夫人。

窓ガラスに両手をあてて、雄輝は外の暗がりをながめていました。

「うん。まるで川の中にいるみたいだよ、おばさん」

外の景色があまりものすごいもので、この嵐のせいで小学校最初の運動会が流れてしまったことなど、すっかり忘れてしまった様子です。

ピカッと光った雷に「キャ——ッ!!」とすっとんきょうな声。

これは雄輝の母、翼夫人です。間髪を入れずに

グァラ グァラ グァラ ドッシーン!!

「うわあ、今のはどこかに落ちたぞ」

森の中の一軒家は気楽なものです。

「カーテンをひいて下さらない、冴子さん。わたし雷って苦手です。」

「なァんでさ、お母さん。こんなにおもしろいののに」

こんなやりとりをしり目に、翼氏と有澄氏は優雅にチェスに興じています。

旧式の大きな暖炉に、照り返しでチカチカ光る石炭をたすと、ゴォツとかすかな音をたてて燃え上がりました。

時計が9時を打った時、

(未完)

(作業@2016年1月20日)

作業

2016年1月20日 リステラス星圏史略 (創作)



第一章 森の中にて

(さあ、今、あなたの記憶を封じました。——不安ですか)

(ええ少し)

(四年たったらお迎えに参りましょう。これが私(わたくし)からのせめてもの贈り物。全てを忘れて、もう一度、なんの制約もなしに子供の時をお過ごしなさい。

短い休暇です。思う存分。

四年たったら……)

× × ×

夜明け前に軽い休止をとった真里砂は、また例のいつものあの夢おを見た。四年たったら、四年……、と、彼女は言った。

そして、四年目。確かに彼女は来たのだ。と、真里砂は二年前のその日の事を思い起した。

夜の漆の黒い髪。闇色の瞳(め)に、なめした皮の赤銅(あか)い肌。

その端正な憂えげな面ざしに、少し再会の喜びを差して、真里砂の記憶にある粗末な戦士の服とは打って変わったまうな、一点の非の打ちどころもないスーツ姿で、彼女が学園の面会室に現われた時には、さしもの真里砂もずい分驚かされたものだ。

美しい人、だとは記憶を掘り返す度に思っていたけれど、彼女があでやかである事などは全くの予想外だったのだ。

が、彼女は、約束の非まで待って真里砂を連れて帰る事をしなかった。

できなかつたのだ。……………。

……(皇女(おうじょ)殿下)

一月も速くに彼女は真里砂の窓辺に立った。

夜に溶ける色の長い布衣(ぬのごろも)を、あの粗末な毛皮の上にまとして。

寄宿舎の寝室の窓はなぜか音もなく静かに開いた。

あの晩、全てはもやに包まれて月も星もなかった。

(皇女殿下、大変な事が起りました。わたくしは行かねばなりません。……時が満ち、“通路”が開かれるのを待って、わたくしはあなたをお連れするつもりでした。が、一刻を争うのです。わたくしは、冥府の扉を抜けて大地へ参りますが、ご存じですね。この道は我ら旅人(たびと)の

みに許されています。あなたをお連れする事は今はできません。)

(そんな。そんなアルマリオン。——わたしはどうすればいいの?)

(お元気で。マーライシャさま。)

(マーライシャ。……それが、わたし?)

(生まれた故郷(くに)を忘れてはなりません。あなたの大地を忘れぬ限り、必ず道は開けましよう……………)

生まれた土地を忘れる。

大地の民である以上、それはあり得ぬ事だった。

永遠の旅人である彼女は知らないのだ——大地が、その国人(くにびと)をどんなに激しく呼ぶものなのか。

うばやのおごと。

「ひめさま、いつまでも屋根の下にこもってないで！」

ばたん！ と勢いよく枝折り戸を押し開けて、皇女の乳母であるメリマアルがどかどかと部屋に入ってきました。

「子どもは外に出て、おはたで遊ぶのがお仕事ですよ！」

皇女の兄である皇子マリシアルが言い返しました。

「ぼくら白王家の人間にとっては、勉強も仕事のうちだよ」

「勉強！」

へん！ とメリマアルは鼻を鳴らしました。

「いい若いものが、こんな上天気の後後に、日陰にこもってだらくらおしゃべりするのがですか！」

「おいおい……」

威勢のいい乳母のいつもの調子に、失笑しながら膝の上に崩れ落ちたのは、その「だらくらおしゃべり」を繰り返していた、球地人の血を引く流れ商人のガトウィングです。

「そんなんだから、こういう怠け者に育ってしまうんです！」

びし！と、そのガトウィングを指して断言するメリマアル。

「そりゃないぜ、流れ商人ってのは、これでも大変な仕事なんだぜ！」

「ひとつのつくったものを、ただ右から左に運んでいるだけでしょうが！」

〈ごくまっとうな〉と自認する農婦出身のメリマアルは白玉城下の育ちではないので、どうもいつまでたっても、都に出入りする〈うさんくさい〉連中とは、折り合いが悪いのでした。

「とにかく、学問なんてえものは、もうちょっと大きくなられてからでよろしい！」

皇妃さまが何とおっしゃろうと、乳母のこの私が許しませんよ！ ひめさまは、もう、お外にいかれるお時間です！」

腰に手を当てて踏ん張る若い乳母の一步も譲らないぞという剣幕に、皇子・皇女が三歳の時からつきっきりで教えを授けている教師連は、それぞれあきらめたように苦笑し、目を見交わして、授業の……じつのところたしかにただの「茶話会」と化していたのですが……の終了宣言を、受け入れたのでした。

(めも) (創作ノートより) (@中1か中2?)

『 (創作ノートより) 』 (@中1か中2?)

2006年7月11日 連載 (2周目・大地世界物語)

ダレムアス全体にとって《聖》である数は4であり、
6はマーシャにとって重大な決定要素を持つ。

※ダレムアスにおいては、生後6年間は一年に一歳。
その後は4年の一歳ずつ。

皇子生まれる
(この間6年)
皇女生まれる。

《大異変》
諸侯会議が開かれる。
皇女と西の皇子婚約。
(この間30年)

皇女、丸い地の国へ。
(この間4年)

ルア・マルライン落城。
皇子東方へ。
(この間6年)
皇女、ダレムアスに帰る。

リステラス星圏史略
古資料ファイル 4-3-1
『皇女戦記』
(皇都陥落・その後)

<http://p.booklog.jp/book/108659>

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/108659>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/108659>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ